

自註現代俳句シリーズ

鈴しげを集

(社)俳人協会 平成十二年二月十日

づかづかと不幸来てをり麦の秋

葉生姜にたばしる雨の祭かな

一夜さは雨あたたかに年の暮

忘年会くづれの熱き蕎麦湯かな

武蔵野の雛の小家に帰りけり

若楓一翼水に拡げたる

長浜も余呉木之本も花の雨

雨やがて霪となりたる柚子湯かな

かすみ草仕事の休み貰ひけり

朝顔の種採って母帰りけり

白靴のマンハッタンに出かけたる

お遍路にむかごが炒ってありにけり

冬田道弥太郎一茶通りけり

公家顔の京の車掌や花の昼

馬車道のアイスクリンの秋日和

雛の前妻がワイプロ打つてをり

短夜のやかなの国にあそびけり

東京大学総長室の扇風機

餛飩種踏んでゐるなり夏浅き

砂山の砂走りけり新松子

撫子や芭蕉に寿貞まさおふう

ソ連邦崩壊雪が降ってをり

水仙の横たへてある閻魔かな

越後首夏造り酒屋の前にをり

烏瓜の花を卑弥呼とも思ふ

子の顔にときどき合ひぬ梅雨の家

空青し風の序の櫓くぬぎ

花あげて葱の十哲ならびけり

コスモスの風のそばまで行ってみぬ

一月の角袖の鳶通りけり

小春日のあそび足とも技芸天

空晴れて落葉くらべの雑木山

蜜柑むいてつまらなさうに母居りぬ

鴨の岸仕事人間やめにけり

百千鳥あづま根笹の道ゆけば

霜月のもぐさの赤き袋かな

妙味とは蕎麦のことなり冬紅葉

短夜の千鳥の皆生泊りかな

日田杉の身に入む山に泊りけり

炬燵猫をんなの疍にさはりけり

本をまづどろにかせねば煤払

終